

# 「すべてが神の計画」

～冒瀆する者たち 御霊に生きる者へ～ マルコ 3:20~29

## ■ だれと話していますか？

目覚めたとき、最初に話した人はだれだったのでしょうか？私たちはだれと会話している時間が多いのでしょうか？あまり意識していませんが、自分の声を聴いていることが多い事に気がきます。独り言のように口に出したり心に思い浮かべたりして、自分の声を聴いているのです。

人は誤った情報を聞いたときに、約 40%の人はその情報を死のまま信じてしまうそうです。そして 37%の人が疑いながらも信じており、23%がそんなことはないだろうと考えているというのです。約 8 割の人が誤った情報に影響を受けてしまうと言われています。

神様の計画を壊すのはだれでしょうか？実はそれは私たち自身なのです。私たちは誤った情報の影響を受け、自分で自分に誤った情報を語りかける事で神様の計画を無にしているのです。クリスチャンである私たちは神の言葉を聞き従う事が大切であることがわかります。神様が私たちに何を語られているのかを知って、その言葉を信じ従う事が大切です。

## ■ イエスが家に戻られると・・・マルコ 2 章 20

この箇所で「家」には「バイト」という言葉が使用されており、この言葉には「箱舟の部屋」という意味があります。「大勢の人が集まって来たので」の箇所の「集まって」は「アーサフ」という言葉が使用されており「箱舟にすべてのつがいが集められた、ノアの子供達が集められた」時の「集められた」という言葉が使われています。大洪水の時にノアの箱舟によって救われたように、ここに集められた人々にイエス様の御業によって救いが起こる事を示唆しています。「みなは食事をする暇もなかった」の箇所の「食事」には「ヘレム（苦役）」が使われていて、創世記 3 章 17 節の「あなたは、一生、苦しんで食を得なければならぬ。」の箇所で最初に使われています。

そのためこの箇所は、イエス様のよって集められ、その救いの御業によって苦しみから解放される事が意味されている箇所となります。

## ■ エルサレムからくだってきた律法学者たち

ユダヤ人はメシヤ（救い主）を待ち望んでいました。律法学者達はイエスがメシヤではないかという噂を聞いてやってきたのでした。当時、メシヤであると判断するためには、1) ユダヤ人のかねてツアラアトが癒やされる。2) 口のきけない悪霊につかれた人が癒やされること、他にもいくつかあるがこのようなしるしがメシヤのしるしとされてきました。マタイ 12 章 22 節ではイエス様のもとに「悪霊につかれて、目も見えず、口もきけない人が連れてこられた」事が記されており、イエス様のいやしをみて人々が驚いたことが記されています。

これに対して律法学者たちは「彼は、ベルゼブルに取りつかれている。悪霊どものかしらによって、悪霊どもを追い出しているのだ。」と言っています。彼らは最初からイエス様を殺そうと計画していました。それはイエス様が自分達の思い描いていたメシヤ像と違っており、しかも群衆が自分達から離れていった事への嫉妬心からでした。

「ベルゼブル」とは「ベル（主人、支配者）」「ゼブル（高き（天の）住まい）」と言う意味ですが、「ゼブブ」は「ハエ」を意味する言葉で、「ハエの主」という意味で用いられていました。彼らは悪魔を汚れたものとして見ていました。しかしイエス様はこれを「サタン（敵）」と呼んで彼らの視線を正そうとされます。そして彼らをそばに呼んで例えを持って説明され、サタンに対抗するには「縛り上げる（自由にさせない）」（マルコ 3 章 27 節）必要があることを教えられます。

## ■ 聖霊を冒瀆する罪

「神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。」（ローマ 8 章 29 節）御子のかたちと同じ姿とは、私たちが罪人である事を理解して悔い改めて十字架に架かる姿（ガラテヤ 2 章 20 節）を現しています。サタンは「おまえは悪くない」とささやきますが、神様は自分が悪かった事を気付かせてくださいます。自分で善悪を判断してきた私たちが、聖書の言葉を通して自分の罪を認める事が出来るようになる姿を指しているのです。

「このように言われたのは、彼らが、「イエスは、汚れた霊につかわれている」と言っていたからである。」（マルコ 3 章 30 節）律法学者たちはイエス様の事を悪霊につかわれていると言い、自分達の心の声が正しいと判断していました。

「冒瀆する」はガーダフと言う言葉が用いられています。ガーダフが最初に使われているのは民数記 15 章 30 節です。

「祭司は、あやまって罪を犯した者のために、【主】の前で贖いをしなければならぬ。彼はあやまって罪を犯したのであるから、彼の贖いをすれば、その者は赦される。」（民数記 15 章 28 節）「国に生まれた者でも、在留異国人でも、故意に罪を犯す者は、【主】を冒瀆する者であって、その者は民の間から断たれなければならない。」（民数記 15 章 30 節）

ここでは気付かずに犯した罪は赦されるが、許斐に犯した罪については「神を冒瀆する者」と言われています。

律法学者たちはイエス様がメシヤだと気付いていました。そのしるしを見ましたが、自分達の思い描いていた姿と違ったので、これを否定したのです。

イエス様は十字架の上で「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」（ルカ 23 章 34 節）と祈られました。自分を十字架に架ける人々の行為を、知らないでやったことなので赦してくださいと祈っておられます。最後まで罪人を救おうと願い続けて祈られた言葉でした。

わかっているのに選ばない事は聖霊に従わないという事です。聖霊に従うものとなりましょう。

## ■ まとめ

私たちは間違った言葉を選んで、まちがった判断をしていないでしょうか？自分の言葉ではなく神様の言葉を聴いて正しい判断をしていきましょう。自分を正しい者として生きるのではなく、神の前に自分を罪人と認め、赦された者として生きましょう。頑なな思いで、わかっているのにやらない人生を捨てて、神様の言葉を聴いて、罪人のかしらを赦してくださる方の恵のうちに生きましょう。

「まことに、あなたがたに告げます。人はその犯すどんな罪も赦していただけます。また、神をけがすことを言っても、それはみな赦していただけます。しかし、聖霊をけがす者はだれでも、永遠に赦されず、とこしえの罪に定められます。」（マルコ 3 章 28、29 節）

（要約者：日名 洋）

（2022年 11月6日）